

『三升増鱗祖』について (一)

松 原 哲 子

『三升増鱗祖』は安永六年（一七七七）に鱗形屋から刊行された、恋川春町画作の黄表紙である。本作にみられる回陽堂三升屋平右衛門の艾と鱗形屋板の草双紙類との異類合戦の趣向は、翌安永七年に同じく鱗形屋から春町が刊行した『辞闘戦新根』の先蹤であり、天明二年（一七八二）の山東京伝『御存商売物』（鶴屋板）の原型を成すとされている。^{注1}

先行研究の中での本作品への評価を概観してみると、『稀書解説』は、「式亭三馬選定の名作廿三部中に於ても特別の変り種」で、「二商店の広告本」を「売物にしたりとすれば、随分ともに購買者を茶にしたる出版物」と評価している。また、『続黄表紙解題』（森銑三著、昭和四十七年、中央公論社）でも「商家の宣伝用の草紙類も、後にはいろ

いろつくられるがこれはそうした文学作品の先蹤を成している点で珍しい」と評価するものの、その内容については、「やや無理な趣向を立て過ぎた形であり、春町の作品としては、上乘のものとは称し難い。巻中の対話などにも、特に見るべきものがないのが寂しい」、中巻から下巻への展開については「木に竹を継いだやうな形で、感心しかねる」としている。

この問題について、松田高行氏は「恋川春町の創作意識」（『帝京平成大学紀要』第九巻第一号、平成九年六月）で、「上・中巻が鱗形屋の宣伝に終始したため、黄表紙の持つ味わいが全く欠けてしまったので、後から黄表紙的な異類合戦の話を付け加えたというような経緯でもあったのかも知れない」、「鱗形屋の宣伝に徹して書かれたもので、

春町の黄表紙の流れを見るには参考にならない」とする。

以上のように、本作品を安永期の春町の創作活動や、黄表紙史の中で位置づけようとする時、評価できる点は商家の宣伝に草双紙を利用したという着想のみであって、作品全体としては、「発想を青本の枠内にとどめてしま」って「黄表紙的な奔放な発想による創作には至」っておらず、「それなりの出来栄えになっていたが、戯作文学としての完成度はまだ低い」（松田氏先掲論文）とされている。

いわゆる黄表紙と称される草双紙を「作品ずつ評価する際、大きな基準となるのは、いかにそれが「黄表紙らしい」か、つまり言い換えれば「青本とどれだけ異なるのか」ということである。黒本や青本といった従来の草双紙の枠から飛び出し、独自の着想や趣向が体現できているかという点が、重要な判断材料となるのである。

この基準に照らし合わせれば、本作品は取り立てて注目されるような要素のない、黄表紙らしい面白みに欠ける、従来の青本と大差ない作品と位置づけることになるであろうか。しかしながら、このことは同時に、本作品を伝統的な草双紙の枠組みの中におさまっている標準的な作品と評価することが可能であることを示しているようにも思われる。

『菊寿草』序文にあるような、『金々先生栄花夢』刊行を

契機に草双紙全体が質的に変化した、春町が草双紙の世界を変えたのだという立場に立てば、『三升増鱗比』は春町の本領を発揮できなかった、過渡期の一作品だと位置づけることになり、先行研究における本作品に対する評価は妥当なものと考えられる。

ただし、そもそも「黄表紙らしさ」を読み取る際の比較対象である青本、つまり従来の伝統的な草双紙とはどのような性質のものであったのだろうか。

影印や翻刻などで容易にみることが可能な、代表的な黄表紙をみてみると、既存の赤本・黒本青本を、いわゆる黄表紙に比べて時代遅れで古くさいものとして扱う例が多くみられる。しかし、これは恋川春町や大田南畝といった人物が作品中に趣向として取り入れたものを、他の作者がそのまま模倣・転用するかたちで利用した結果、黄表紙の類型的な趣向のひとつとして固定化されたものであって、既存の初期草双紙の姿そのものではない。^{注2}

実際、鱗形屋板の初期草双紙に散見される「大木の生え際」という言葉遊びの表現は、安永六年（一七七七）『南陀羅法師柿種』（朋誠堂喜三二作、恋川春町画、鱗形屋板）で「うぬふるいせりふだか大ぼくのきり口ふといのねときた」と誤用され、翌安永七年『辞闘戦新根』にそのまま登場人物名として採用されると、その後、天明二年『御

存商売物』、天明四年『従夫以来記』（竹杖為軽作、喜多川歌麿画、蔦屋板）、享和二年『稗史憶說年代記』（式亭三馬画作、西宮板）など多くの黄表紙中で「大木の切り口」という形が踏襲されてしまい、結果として現在国語辞書の類で「大木の切り口」が江戸時代の流行語として立項されるに至っている。また、本作品に登場する「ひきのやのどらやき」という言葉も、本来は「ひきのやのあんころ」が正しい表現だが、これもまた『南陀羅法師柿種』以降黄表紙の中で形を変えてしまった語句の一例である。^{注3}

これらの事象から恋川春町の黄表紙界への影響力の大きさを読み取ることができるといふ点では、春町の登場によって草双紙が変化したという『菊寿草』の捉え方が妥当なものだといえる。しかし、その反面、春町が初期草双紙に類出する言葉を誤った言い回しで作品の趣向に取り入れているにも関わらず、そのまま転用し続けていくという他の黄表紙作者のあり様は、当時の黄表紙作者全員が従来の枠組みを脱し、独自の着想の下で奔放な創作活動をしように意図してはいなかったのではないかという疑念を芽生えさせる。

そもそも、枠組みを外れていることに面白味を感じ取るには、その前提として読者の中に「通常ならばこのようなものであるはずだ」という草双紙に対する認識が存在して

いたはずである。事実、安永期までは鳥居派の絵師が画工をつとめるような作品や、富川吟雪の作品などが新板物として刊行されている。また、現存する諸本をみてみると、いわゆる黒本青本にあたる草双紙が、黄表紙時代に入ってから再摺本として刊行されていたことも確認される。よって、読者は従来の伝統的な草双紙といわゆる黄表紙との両方を、同時に入手し、目にもすることも可能であったと考えられる。

よって、従来の枠組みの元々草双紙が持っていた面白味や工夫と、枠から外れることによって新たに黄表紙が表現したものの違いを整理し、明確に示すことが、草双紙を編年的に追う上で不可欠である。そして、そのためには、読む価値があるものとしてこれまで影印・翻刻され、紹介されてきた黄表紙を追っていくだけでは限界があるといえる。そこで、本稿では草双紙史を考える上で最も重要な人物の一人である恋川春町の、黄表紙草創期のものである『三升増鱗祖』を紹介することから、諸問題への取り組みを始めてみたい。

注一 『黄表紙総覧』（棚橋正博編、日本書誌学大系四十八、青裳堂書店、平成元年）

二 拙稿「草双紙における流行語の位置」（『近世文芸』第

六十八号、平成十年六月）参照。一度、黒本青本と結びつくものとして黄表紙の中で趣向に取られた言葉遊びの表現が、そのままの形・組み合わせで後の黄表紙に転用されていく現象について示した。

三 拙稿『草双紙年代記』考——上巻部分を中心として——（『実践国文学』第六十九号、平成十八年三月）参照。

付記

本稿を成すにあたり、資料の調査・掲載を許可下さいました国立国会図書館および都立中央図書館に深謝いたします。

（まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師 実践女子大学大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学）

三升増鱗祖 翻字

翻字に際しては、国立国会図書館本を底本とし、欠丁部分や不鮮明な箇所については都立中央図書館加賀文庫本で補った。また、文節・文の区切り目に適宜空白を挿入し、科白部分については、発話者を（ ）内に示し、「」を付した。

○上巻

（二丁裏）

むかし近江国伊吹山のふもとに 永持道意といふものあり
もとは藤原氏のれきくなりしが 保元の乱をさけて
此所に引こみ いぶき山のよもぎをとり せいほうしても
ぐさをこしらへ 世のいとなみとて なしける

あるとき 道意はもぐさのせいほうにつかれ まどろみけるに
ふしぎのれいむあり

（池州稲荷）「ぜんさいくくわれはこれいずの国 山内や
とふもの、地にすむ 池すいなり也 われむかしのちなみ
ありてなんちにさいわいを告るなり こよひよしともの
三男よりも 此所に来るべし かれはゆくくく天下をし
やうあくして 四かい太平になすべきくわんじんたいどの
さうあり なんち かげ身をはなれず もりたてなば ゆく
すへいとなみさかゆべし 此事をつげんために来りたり
ゆめくくうたがふことなかれ」

（二丁裏）

よりとも公は軍の利をうしなひ 石山でらより只ひと
いぶき山のへんへおちゆき給ひ 道意が家ののへんにさま
よひ給ふを 道意もしよりとも公ならんかと心づきや

うすをたづね申すにさういなければ大によるこびかくまひ申ししよくじをすゝめまいらす折ふし平家のさむらい弥平兵衛むね清おつかけ来りいけどりみやこへともなふ

(弥兵衛宗清)「それがしとても此たびはたすけたきぞん念いけのぜんにへねがひなばいのちにつゝがもあるまじなんじさほどにおもはゞそれがしと共にひとまづみやこにをもむきいけどのの御なさけにてをんるにもきはまりし上はすぐゝつきそひてゆくすゑをも見とゞけよ郎等ともちがひ町人の事なればきよもり公の御とがめもあるまじ」

(永持道意)「何とぞ御いのちたすかり給ふやうに御とりなしねがひ上ますたよりのなき御身の上いづく迄もつきそひ見とゞけ上ましたい」

(二丁表)

よりもいけのぜんにのなさけにていづの国へをんるにさたまりければいよゝいけすいなりの御つげむなしからずと道意大いに悦びいづのくにへつきそひ参たきと六はらへねがひすみてたびの用意とりまかなひいづの国へとこゝろざす

すみなれし都のふじをあとに見てゆきのむらきへ

四方白く夕日てりそふ四方の赤これを合せて八けいやせたの長橋せたうなぎなごりあふみの源五郎ぬらりくらりとゆくほとにふなちをわたり山をこへ少しうさを忘給ふ

(永持道意)「こよひのおとまりではめしもりをあやなしかけませふきみにも少しおたのしみしかしゆびのまたにお心付られませ」

(二丁裏・三丁表)

かくて道意はより朝をともなひいづの国につきしかばいけすいなりのかたはらにすみてをとよりなれしもぐさせうばいをしけるにそのころ東国に切もぐさといふ物なかりければてうほうなる物なりとてことの外はやり大小めうよりおびたしく御用仰付られあきないはんじやうしけるかはらけ二ツを合せつ百てう入りをぞこしらへけるこれきりもぐさのはじめとかや

よりも公その比は若しゆさかりにてうつくしければしよ人たちとまりて故人盛府にそのまゝなりといふらしけるより道意おもひつきにてもぐさのはんこうを市松ぞめにぞしたりける

(永持道意)「ずいぶん御せい出されませ外へてまによりを出すよりも内でいたせば大ぶんわりがよふこさります

それがすむと 小児を仕入れねばなりませぬ」

そのころ もぐさやがをちつきしとなり 山内や孫兵衛
といふもの有 これもゆへあるものなりしが たびくの
兵らんをちぶれ 伊豆の国へ引こみいけるがもとより才
智あるものなりければ いにしえ今の事をかきつゝり 双紙
となし 又はむかしの名將 ゆうしのすがたを紙にすり
さいしきをなしてあきなひければ ことの外はやりける
其ころは しょ人此糸をうるし糸といひてうれしがり うれ
ることかぎりなし

(山内屋孫兵衛)「此おもひつきは ばつとをちがきそうな
ものじゃが となりは大ぶんあきないがある まけてはな
らぬが」

(三丁裏)

ある夜 あかつきに いけす稲荷 山内や孫兵衛がまくら
がみにたち給ひ となりのもぐさやがせがれなりといふ
若衆は よしともの三男よりもなれば 道意と心を合せ
世に出さば 天下一とうの後 なんちも家とみさかふべしと
あらたにつげ給ひてまどのせうじの穴よりとびさり給ふ
(夜回りの者)「あ、ねわすれた もうなん時だしらぬ」

(四丁表)

其ころ いづの国には北條の四良時まさ 其身高禄を領し
家とみ栄へける 山内や孫兵衛は おくがたの御用うけ給
りたびくひろしきへあきなひに來りける 其ころはめ
づらしきそうしなりければ 女中以下へやがたのまでこ
との外悦ひもてはやしけるゆへ あきなひはんぜうして
よろこびける

(山内屋孫兵衛)「せきや様 これを御らん被成ませ 市村
のきやうげんほんでござります」

(腰元せきや)「これほんやどん こんどの糸のい、くわん
をんぎやうをもつてきておくれ」

(女中)「ほんにばからしいの」

(女中)「これを御らん けしからんの」

(四丁裏・五丁表)

よりとも公きりもぐさのおろしに出給ひしが はまだつ
るが岡の八まん宮へ参けいし給はねば ゆく末のぶうんを
もいのらんとまうで給ひ 政子ひめを見そめ給ふ

(頼朝公)「さてもうつくしい ろこう 幸朝にいろはを
加味したおひめさんといふ おくすりをあ、一ふくのみ
たい」

北でうとき政のむすめ 政子ひめ づるがおかの八まんへ

参けいしてよりともを見そめ給ふ

(政子姫) 「市川門之介がぶたいがほにいきうつしさ」

ひめぎみのつけかろう いけすか新御左衛門 御とも

「せきやぼう 何をきよろ／＼見るのだ ああわかしゆを見るまで をれがかほを見るきはしないか」

(五丁裏)

まさごひめ よりともを見そめ給ひしより ひたすらにこひわび給ひ 朝夕の御しよくじもす、まず ぶら／＼わづらひ給へば 時政あんじ 大かたならず 手いしやくだすりう あんやうすをうかゞひ これは四花くわんもんをたくさんすへ給ふが大切と申上る

(くだす流庵) 「明日からおきうを御きこん次第遊されませこれはとかくめづらしいそうしなど 御らんなされますがようございます れいの山内やの事でござりませう」

画工 春町戯作

○中巻

(六丁表)

御手いしやくだすりうあんがさしづにより ひめぎみの

御びやうき御なぐさみのため さつそく山内や孫兵衛をよひよせければ からかみびやうしをはしめ あを本あかほん 黒びやうし 一まいのうるしゑ 新はん古はんのかつ／＼とりあつめ持参しけり

此とき こしもとせきや 孫兵衛をこかげへまねきひそかに申けるは ひめぎみの御びやうきは 過しころ つるかをか八まんへ御さんけいの時 切もぐさうりの若衆を見そめ給ひよりの御恋わづらひ也 此若衆はさだめて 当国のものなるへければ 何とぞ名ところをき、出し ひめ君の恋をとりもちさし上られよとはなす

(山内屋孫兵衛) 「それこそいとやすい御用 そのわかしゆは かたこしとなりの もぐさや道意と申もの、せがれさいわいひめぎみ四くわの御きうあそばすはづと承れば そのもぐさの御用にことよせ 御出入をねがうしゆだんをめぐらしませう そのわかしゆは とんとしん車にいきうつしさ 此ゑよりもちつとにていやすよ」

(六丁裏)

孫兵衛は いなりの御つげにてもぐさやのわか衆はより朝公なりといふ事をかねてしりたる事なれば 何とぞ北条のひめぎみにしのびあはせ ゆく／＼は時政のむことなし 世に出さんとおもひ こしもとせきやしめし合せ 此度

姫君御きう治の御もぐさの御用を道意に仰付られ下されよ
とおくかろうへ願ふ

(山内屋孫兵衛)「切もぐさの義はしごく御てうほう 其上
せいほうがかくべつでござります」

(新五左衛門)「しんびやうのねがひ 新五左衛門とくしん
申た 早々切もぐさをたくさんに持参いたせと その道意
とやらんに其方すぐへ申伝へよ それはさいわいの事
だ」

(七丁表)

孫兵衛もぐさやへ来り 政子姫の病気の事ならびにもぐ
さの御用仰付らるゝ事をくはしくはなし いけす稲荷の御
つげありて よりとも公なりとしりたる事迄 初めて道意
に物がたりし 此時をさいわいに力をあはせて よりとも公
を世に出し奉らんといふ

(山内屋孫兵衛)「おたがいにもとは御けらいすじ めうり
のため 心を合せて忠義をつくしませう 弓矢をすてた今
の身なれど 心はするどい千まいどうし うはべは丸いなぶ
くらに たちまち平家をうちぎりのざりはわすれず うそつ
かず そこで本屋でござりやす」

道意 孫兵衛がこゝろざしをかんじより朝公よりあづか
りし白はたをとり出し 孫兵衛に見せてしんていをあかす

(永持道意)「かうした所は矢口のわたりのどうねんといふ
きみなれど われらはもはや丁人となり されば ふたゝび
きつたりはつたりは気がなし たゞあなたを世に出して上
たいぞんねんさ われらが切つたりはつたりはもぐさを
切たり ふたの紙をはつたりじや」

(七丁裏・八丁表)

ひめきみ御きうにつき 長持道意 御つぎへたつめ 山内
や孫兵衛も 御きう御まぎれのために仰付られたる ゑぞう
しを有たけぢさんして 御めにかけてれば 御たいくつ少も
なく あつさも御わすれなさるゝほどの事にて 御きうはや
ゆきしばしがほとに きりもぐさ 三升までぞすへ給ひけ
る

(流庵)「新五左衛門殿 あとのおきうを はやくへ」
(新五左衛門)「りうあんも もはや一升すみましたか 扱
へ おほかのゆく事でござる これですがふ二升わたし申
すぞ」

(山内屋孫兵衛)「これはどうも いそがしくてならぬ と
んとごく月の新板ものおろしといふいそがしみだ」
(腰元せきや)「さあへもつとおもしろいそうしを上な
さい 此そうしを御らんなされば おまぎれになつて少し
もおきうがおあつくなく 御たいくつもなくおまぎれ遊ば

すとの事はやく〜」

(八丁裏・九丁表)

こしもとせきや 人なきおりをうかゞひもくさやのむすこを御居間へつれ来りひめ君にあわせ申しその身はきを通してそのばをはづし御つきへゆく

(政子姫)「わしが病氣はそなたをこひこがれての事きを三ます迄すへたもそなたへのしんぢうとおもふばかりそなたの心がつれなければいくらきをすへたとてこひわつらひがなをろうか」

(頼朝公)「おこゝろざしは有がたぶござりますれどもとせき政さまへきこしましてはお身のおためになりますまいこゝおはなし被成ませ」

北條時まさやうすをたちき、「たとへの通りにむすめと小ぶくろにはゆだんもすきもなるものではないしかしきやつは源氏の正とうよしともが三なんよりともとせき、及べばむこにとつてもふそくはない」

(九丁裏・十丁表)

ひめぎみさうだんうまくきまりたるさい中いけすか新五左衛門さかゝりふぎもの也とてよりとも公をさん〜ちやうちやくするゆへこしもとせきやそのばをのがれん

と新五左衛門にぬれかゝりければもとより新五左は役がら不相をうにかねてせきやにのびていけるゆへとけ〜となりてそのばをみのがす

(腰元せきや)「いけすかさんこれもおひめ様のふと被成たおできこゝろわたしがおまへにかうほれたらおまへにくいかへこうてをしめたらはらがたつかへ」

よりとも公きうばしにて新五左がよぎの四すみを打つけもし此事をとき政どのへいつつけるともつと大きくしてあたゝをすへるが おとなしくしろ さあいつつけ口をせうかしまいかとていじめ給ふ

(新五左衛門)「せきやぼうそもじがいたいしいばつかりで此わかしゆをぐつとゆるしてやりのさやらうそくより大きなきをすへるとは又あんまりむごじるしむごいのねだとうぞわびごととしてゆるしておくれすいた男のなんぎのばをわらつているとはきようがないあゝあつやたへかたやこれにつけてもなつかしいはひきのやのどらやきじやさつまいもはなきかいくよもちはをらぬか だめへ〜」

物をきめる事をくぎをさすきをすへるといふ事此時よりぞ初りける

(十丁裏)

もぐさやのむすこよりともなる事を時政かねてしりたる事なれば政子としうげんをとゝのへ悦ひけり扱政子姫の病氣速本ふくありしは永持道意がもぐさを三升すへられしゆへなればもぐさやには三ますを家の紋所にせよとて給りけりならばにたいら氏の平の字をほうびとせよとせける

扱又三升のきうをたいくつなくすへられしも山内や孫兵衛か草双昏をかつ見給しゆへなれば孫兵衛は道意に同やうの功也とて孫兵衛には江のしまの弁才天より給はりし三ツうろこの紋所をほうびとしてくれられ長く定紋にせよとぞ申渡されける

(永持道意・山内屋孫兵衛)「身ふせうのわたくし共へうろこがたの御紋所平の字を給はる事身にあまりまして有かたふ存ます」

画工 恋川春町戯作

○下巻

(十一丁表)

さるほどにもぐさや道意は北条とき政より三升の紋所

と平の一字をもらひむさしの国江戸へ下り大でんま丁の三丁め本名とをりはたご丁といふ所へもぐさみせを出し三升のものの中へかたはみの定紋をつけ三ますや平右衛門と名のりあきないますはんしやうし切もぐさの元祖とあふがれふうきの身となりそのちよりとも公は天下のあるじとなり給へばいよく本ぐわいをとげて今の世とも栄けり

(客)「くんさいもぐさをくんさいませ千てう入も二はこべゑかいますべいこゝさあくんさいませ」

(十一丁裏・十二丁表)

山の内や孫兵衛も時まさより三ツうろこの定紋をもらひこれも江戸大でんま三丁目へ引こし地の内へ池すいなるの社をくわんせうしもぐさやとのきをならへ家名をあらためうろこがたや孫兵衛となのりゑそし問屋の元祖とあふがればくたいのさうし一まいゑをしこみ諸国へまわしあきない日を追てさかんにはんせうし今の世までもかくれなくいへとみさかへけり

(鱗形屋の使用人)「らいはるの新はんはどれもてきがようござりますこれでてうと十こりからくりました」

(鱗形屋孫兵衛)「まづ少しやすめ」

(店先の看板)

三升増鱗祖 みますくろうこのはしめ

春町作 三冊

親敵討腹鼓 おやのかたきうつやはらつみ

喜三戯作／春町画 二冊

桃太郎後日咄 もいたらうごちはなし

同／同 二冊

(十二丁裏・十三丁表)

三ますやうろこがたや 兩人はいづの国以来今もつて
となりといひ ことに よりとも公へ心をはこびし事等ひ
とかたならぬ こん意にて 朝夕出あひて酒をなしう
ちくつろきて をくそなくつきあいけれとも 内心にては
北條の姫君病きしそんありしはひとへに切もぐさの徳に
てわかこうばつくんなればなか／＼孫兵衛が及ぶ所にあ
らぬをわが手がらのやうにせけんへいひふらす事はなほ
だきつかいなりとおもひけり

又 孫兵衛は ひめ君のきうをすゑとげし事わがゑぞう
しを御らんありしゆへなればひとへにゑぞうしの徳にし
て 平右衛門がこうにあらぬを 平右衛門われ一人の手がら
のやうにいひふらす事 こんごどうだんの次第也と 内心に
思ひけるゆへにや 兩人酒をんの上にてまどろみけるうち
ゆめにせうばいもの、せいれいあらはれ いくさ評定する

もぐさのせいれいあらはれ いくさひやう定する

「輟耕録の十三科にも すでに鍼灸科あり 艾の効能もつ
とも大にして よくやまひをのぞく いづれの書にもゑぞ
うしを見て 病ひを治すといふ事はなし それになんぞ
うろこかたやが おのれがてからなど、いひふらす事きつ
かいしごく也 此おりをのかさず ゑぞうしのぢんにをし
よせ ひとみにもみつふさん」

ゑぞうしのせいれい いくさの評ぎ
「とにかく そのおんにはすまされぬ 一トいくさなくて
かなふまじ 惣して百人が百人 若い女中にきうのずきな
としばいのきらいなはないもの そのきうをたいくつな
くすへられたは これたがこうであるう 四角な文字の本
とちがひ ゑぞうしときては さじきへも きりおとしへも
むかずといふ事なし 醫は意也といへば ちちのおやかた
のりやうじが すなはちきどりのばで 三ますやごときの
及ぶ所にあらず」

(十三丁裏・十四丁表)

扱も もぐさのせいれい は くんさいを大将として 千てう入
ふくろもぐさをさきにたて あまたのかはらけ入をいんぞ
つしくさぞうしのぢんへぞおしよせけるが しませんくさ
ぞうしの事なれば 切た所があさ草がみ也 よごしてしま

うか引さきすてんにはしかじと三百よきの軍びやうおのく大字中字しんかきとうの筆をよこたへすみをたぶくとふくませむかふものをばおがみけし又めぐりあへば車ぬりみずらくがき十もんじあたるをさいわいになぐりければくさぞうしも一まいゑもみつちやに成てぞにげうせける

ぬつての大將くんさい下知する

(千丁入切艾)「ふでにちからは覚たり ふでもの見せんとぬるまゝに」

もとよりてきはきりもぐさの事なれば此上きられても何とも思はずかゝりけるゆへからかみびやうしはからきめにあひあをぼんはいろをうしなひ赤本の赤はぢちいてぞにげ行ける

さふらひ大小さく七兵衛 おつかけ来りうしろへひけばひきのやも身をどらやきとまへ、ゆく

大將古状揃は弁慶状のいきほひをなしてかゝりけれど大筆にすみをふくみ状にて手ならひ状とぬりかけられ馬引かへしおちのびけり

(十四丁裏・十五丁表)

くさぞうしの方には初どの軍大にりをうしなひむねん

こつずいにてつしこのたびは桶りうのはかりことを以て大がまへねつとうをたゝへ水はちき飛龍水 又は長糸のひしやくなどにてにえゆをあびせければもぐさのせい大きにへきゑきしす、なきふんにて百丁にげあしのはやきやつは千てうばかりもにげのびたり されば此のちもぐさのこうのうかくべつに覚しは此にへゆにてさらされしゆへの事なりとて今の世をゆざらしもぐさといひ其き、かくべつ也 是より又あんじつけて温泉にてさらしければつねのへゆとちがひてばつくんのこうある事也(青本)「ふでとさみとのなかよい物で見しらせた へんほうにあついてもへあついてももつて参らふ きうともいはせぬぞ」

かゝる所にいけす稲荷はくうんにうちのりあらはれ給ひわだんと、のへ給ふ

(池州稲荷)「此たびのた、かひみな孫兵衛 平右衛門兩人がぞくじやうのまよひより出たり まさごひめが病氣平ゆは文武の二道車の両わのごとくにて一ほうかけても治しがたし さればそのこうのゆうれつあるへからす 又いくさも両度のせうぶ五分くゝにわかれたればいづれをいづれと云がたし 此のちはしんていをうちあかしきやくいなくまじわるべし」

(古状揃)「あら ありがたや いづれもないりの御たくせ

んなるぞ 軍をまとめ 引とれく」

(十五丁裏)

ふたりのものは夢さめて たがいのむねをうちあかし 心
のおくのそこいなく ましわるはるぞめでたけれ

千秋万歳 かゝる目出たいぎは御さるまい

画工 恋川春町戯作